

令和 5 年 5 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02335

研究課題名(和文) 中山間地域における高齢者の認知機能維持を目的とした社会生活構造の解明

研究課題名(英文) Elucidation of the structure of social life for the purpose of maintaining cognitive function of the elderly in countrys

研究代表者

伊藤 智子 (ito, tomoko)

島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授

研究者番号：70413490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高齢者のどのような社会生活の様相(社会生活意識・社会とのつながり・人との関係等)が認知機能にどのような影響を与えるのか、その構造を明らかにすることを目的とした。1年目は先行研究の整理を行い、2年目から個別電話インタビューによる質的記述的研究を行った。その結果、中山間地域に暮らす高齢者の認知機能維持を助ける社会生活の様相は、高齢期の心身機能の衰えを受容し、健康管理や自己コントロールをしながら自然豊かな環境の中で、人との助け合いに価値を見出し、人との交流や運動、農業が行われることであることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、高齢者の認知機能に特化した社会生活様相の明確化を目指し、質的帰納的分析により、高齢期の心身機能の衰えを受容し、健康管理や自己コントロールをしながら自然豊かな環境の中で農業を行い、人との助け合いに価値を見出し、人との交流や運動が行われることであることであることを明らかにした。今後この社会生活様相と高齢者の認知機能の独立した関係を検証することで、高齢者の認知機能を維持するための支援に活用できると同時に認知症を予防する地域づくりに貢献できる。本研究はこのように、認知症予防の地域づくりの土台を作ったという意味で社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the structure of what aspects of social life (social life awareness, social connection, relationship with people, etc.) have a positive effect on cognitive function in the elderly. In the first year, previous research was organized, and from the second year, qualitative descriptive research was conducted through individual telephone interviews. As a result, it was found that the aspect of social life that helps the elderly living in hilly and mountainous areas to maintain their cognitive functions is to accept the decline of mental and physical functions in old age, to find value in helping each other in an environment rich in nature while managing their health and self-control, and to interact with people, exercise, and farm.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：中山間地域 認知機能 高齢者 社会生活

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

認知症患者は年々増加し、2015年には462万人となった。今後団塊の世代が75歳以上となる2025年には約700万人を超えると推計されている。認知症は一旦獲得された知的機能が不可逆的に阻害されることにより生じる症候群で、発症要因は遺伝的因子の他に、40代から始まるアミロイド 蛋白の脳への蓄積、生活習慣病（糖尿病や高血圧など）、教育歴の少なさ等の要因が研究によって明らかとなっている。現在、日本の認知症予防施策は、認知症危険因子を除去する行動の推進と閉じこもり予防を兼ねた定期的な運動推進を中心とした集合型の介護予防プログラムの実践に力を入れているが、高齢者にとって生活習慣の修正は容易ではなく、十分な成果が出ていないのが現状である。地理的な条件で集合型の取り組みが難しい中山間地域では、認知症予防を若いころからの生活習慣や教育歴だけに着眼しない社会的な認知機能維持要因を探し出すことが必要である

### 2. 研究の目的

本研究は、認知症予防のための生活習慣の修正や教育歴の延長が難しい高齢者の、普段の社会との関係性の中にある認知機能維持の要因を探し出し「自助」「互助」「共助」に役立つ「認知機能維持を目的とした社会生活」の構造を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

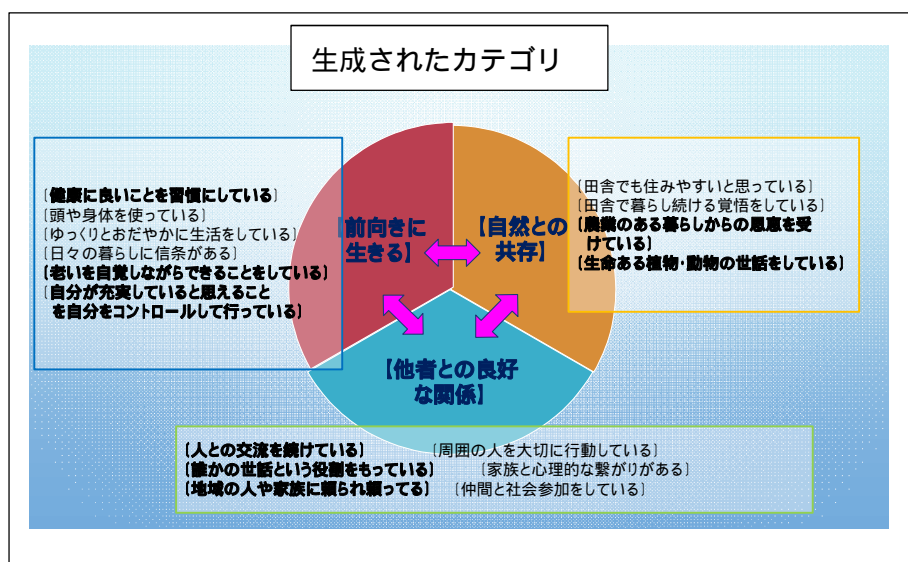
#### 1年目

Shimane CoHRE Study データを用いた縦断研究にて、認知機能が維持できている65歳以上高齢者の社会生活の特徴を掴む。

認知機能と社会生活の関係を検証した論文を収集し認知機能に良い影響を与えると思われる社会関連項目を抽出する。

#### 2年目～3年目

中山間地域に暮らす高齢者へのインタビューにて内容の妥当性を検討した。研究デザインは、個別電話インタビューによる質的記述的研究とした。対象高齢者は、65歳以上のA市社会福祉協議会が所管するA市高齢者クラブの会員で、A市の中でも中山間地域に暮らす高齢者とした。男性5名、女性5名の計10名に対して一人1回30分程度の個別電話インタビューを行った。インタビュー内容は、平均的な一日の過ごし方 人や動物（命あるもの）とのつながり 安心できる環境④毎日の生活中で大切にしていること、とし、参加者の音声をICレコーダーに録音した。インタビューによって得られたデータはすべて逐語録におこした。逐語録の中から、対象者の社会生活の実情、社会生活に対する意識について抽出を行い、意味内容を変えずに抽象度をあげ、カテゴリ化を行った。



#### 4年目

質的記述的研究から導き出されたカテゴリを基に、認知機能の維持に寄与する社会生活についての質問紙調査の質問項目をデルファイ法により検討した。質問項目の検討は、デルファイ法を採用した。検討手順は、サブカテゴリに基づき研究代表者が作成した質問案を共同研究者7名に送付し、匿名で9段階スコア（1.全く適さない～9.非常に適切である）の評価及びコメントを求めた。スコアとコメントを一つの表に集約し、会議において質問案の検討を行った。検討内容は、各質問項目を聞く意味やそのエビデンスを確認したり、回答しやすい聞き方、回答し

やすい選択肢が準備されているか等である。この手順を 3 回繰り返し、質問項目の収斂を行った。

#### 4．研究成果

中山間地域に暮らす高齢者の認知機能を助ける社会生活の実情と意識は【自然と共存した暮らしぶり】【前向きに生きる】【他者との良好な関係】の 3 つのコアカテゴリに集約された。中山間地域に暮らす高齢者の認知機能維持を助ける社会生活の様相は、高齢期の心身機能の衰えを受容し、健康管理や自己コントロールをしながら自然豊かな環境の中で、人との助け合いに価値を見出し、人との交流や運動、農業が行われることであることが推察された。

認知機能の維持に寄与する社会生活についての質問紙調査の質問項目は、属性 9 項目、暮らしの環境について 6 項目、暮らしの習慣について 20 項目、健康について 4 項目、心の状態について 8 項目、人との交流について 14 項目、助け合いについて 10 項目の調査表となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ito T, Okuyama K, Abe T, Takeda M, Hamano T, Nakano K, et al.	4. 巻 16(12)
2. 論文標題 Relationship between Individual Social Capital and Cognitive Function among Older Adults by Gender: A Cross-Sectional Study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 .Int J Environ Res Public Health	6. 最初と最後の頁 2142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph16122142	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Abe T, Okuyama K, Hamano T, Takeda M, Isomura M, Nabika T	4. 巻 10(3)
2. 論文標題 Hilly environment and physical activity among community-dwelling older adults in Japan: a cross-sectional study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BMJ	6. 最初と最後の頁 e033338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2019-033338	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤智子, 大森真澄, 祝原あゆみ, 加藤さゆり, 安部孝文	4. 巻 65(5)
2. 論文標題 中山間地域に暮らす高齢者の認知機能を助ける社会生活の様相	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保健の科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤智子 大森真澄 祝原あゆみ 加藤さゆり 安部孝文
2. 発表標題 中山間地域に暮らす高齢者の認知機能を助ける社会生活の様相
3. 学会等名 日本医学看護学教育学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomoko Ito, Kenta Okuyama, Takafumi Abe, Miwako Takeda, Tsuyoshi Hamano, Kunihiko Nakano, Toru Nabika
2. 発表標題 GENDER DIFFERENCES IN THE RELATIONSHIP BETWEEN INDIVIDUAL SOCIAL CAPITAL AND COGNITIVE FUNCTION AMONG RURAL AREAS-DWELLING ADULTS: A CROSSSECTIONAL STUDY
3. 学会等名 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒田陽子, 小野田慶一, 安部孝文, 武田美輪子, 並河徹, 濱野強, 山口修平
2. 発表標題 高齢者におけるソーシャル・キャピタルが認知機能の経年変化に及ぼす影響 -Shimane CoHRE study-
3. 学会等名 第61回日本老年医学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 さゆり  (kato sayuri)  (10809338)	島根県立大学・看護栄養学部・講師   (25201)	
研究分担者	大森 眞澄  (oomori masumi)  (20437552)	島根県立大学・看護栄養学部・教授   (25201)	
研究分担者	安部 孝文  (abe takafumi)  (30794953)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・助教   (15201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	祝原 あゆみ  (iwaibara ayumi)  (50533824)	島根県立大学・看護栄養学部・講師     (25201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関